

# 保見ヶ丘ラテンアメリカセンター・ニュース No. 33

発行：特定非営利活動法人 保見ヶ丘ラテンアメリカセンター 2011年8月8日

TEL/FAX:0565-43-1607 月曜～金曜 11時～18時

URL: <http://www9.ocn.ne.jp/~celaho/> E-mail: [celaho@gaea.ocn.ne.jp](mailto:celaho@gaea.ocn.ne.jp)

みなさま、こんにちは。  
センターニュース33号をお届けいたします。

## さまざまな事業

文化庁の助成による「生活者としての外国人のための日本語教室」と独立行政法人福祉医療機構の助成による「介護のための日本語事業」がはじまりました。予算をいただき、地域の外国人のための日本語教育を行えます。むろん特定の事業のための資金なので、センターの財政、ブラジル人学校の経営にプラスはありません。加えて外部から教師を招へいすることが義務付けられながら、助成金の支払いが事業終了後であるなど、財政を一層圧迫しています。

それでも、赤字になる心配はなく、一時的な辛抱のつもりでしたが、三月の震災で事態は急変しました。

## 震災の影響は保見まで

3月に自動車関連をはじめほとんどの産業が操業を縮小、真っ先に仕事をなくしたのはやはり外国人でした。

学校にも大きな影響が出ています。

まず、カンチーニョ(日本の学校に通っているブラジル人児童生徒のための補習教室)へ来る子供たちが減りました。

ブラジル人学校としてのパウロフレイレ地域学校へ子供たちを通わせている親たちも、何人かが仕事をなくしました。彼らにとってパウロフレイレは唯一の学校であり、簡単にやめるわけにはいきません。全体に授業料は遅れ気味、未納の家庭も増えています。

寄付も激減し、学校の財政は深刻な状況に陥っています。

いつもお願いばかりで、申し訳ありません。多少なりとものご援助をお願い申し上げます。

## 子供たちの作文

そんな中、やめざるを得ない子もいれば、新しく学校に来る子もいます。

最近カンチーニョに通い始めた少女の作文を紹介します。

ポルトガル語覚えることはとてもイイコトだと思います。日本の学校では、日本語と英語を習うことができます。そしてこの学校、パウロフレイレでポルトガル語をならうことで三か国の言葉を話せるようになります。

この三つをおぼえることで、いい仕事につけるとと思います。日本人でポルトガル語を知っている人はとても少ないからです。パウロフレイレには日本人の先生もいます。わからないことがあれば聞くだけです。パウロフレイレの先生たち、そして校長のジョはとてもやさしくて明るい人です。わからないことがあればすぐにおしえてくれます。

パウロフレイレのいいところは、あそびながら、わらいながら、たのしみながら、ブラジルの歴史や文章のかきかたや文字の書き順をおぼえることができます。そして、パウロフレイレでは、ポルトガル語をならうだけでなく、日本語の勉強、英語の勉強をすることができます。この学校で覚えることはたくさんあります。初めてたいけんすることや、初めて挑戦すること、初めて聞くことば、ほぼすべてがはじめてとゆうようなかんじで、別世界にいるような感じですよ。

この学校はとても楽しい学校です。

(保見中学2年生女子)

教員、スタッフは少しでも良い教育ができるように懸命の努力を続けています。

## ロンガット校長より

ロンガット校長に最近の学校の様子を書いてもらいました。(裏面より)

学校で生徒たちと一緒におにぎりを作りました。山菜のおにぎりです。みんなとても気に入ってくれました。



ケビンは迎えに来たお母さんに会うなり「ママ！ボクが今まで食べたおにぎりの中で一番おいしい

いおにぎりの作り方を、先生に聞いてよ！」



と聞いていました。

セイジのお姉さん(今年の卒業生)は、作り方を尋ねるために、学校に電話をしてきました。セイジが家に帰り「世界一おいしいおにぎりをお姉さんも食べてほしい」と何度も言ったそうです。



私たちは豆、ねぎ、からしを植えました。植物がどのように成長するか、そしてどんな世話をしたらいいのかを学ぶためです。

私たちはいつも子どもたちに

いっています。年上の人を尊敬するように、この世界に生きるすべての動物や植物を尊敬するように、と。

毎朝ヨガをやります。壁に絵が貼ってあって、生徒たちが一日ずつ交代し、リーダーになります。私たちは自分の体、そして自分

の心のトレーニングをしています。

文中のセイジくんの家族はこの夏、ブラジルに帰ります。他にもう一人、2年生の少女の家族も帰国します。

ブラジルで仕事を探す、日本で探す、日系人たちはいつも厳しい選択を迫られています。

子どもたちがどこで暮らすにしても、力強く生きていくための教育をつづけなければなりません。

## 折鶴

昨年はみなさまのお力で高学年の生徒たちが広島に修学旅行に行くことができました。ありがとうございました。広島へは低学年の生徒も含め、全員で折った鶴を持っていきました。

8月5日、翌日の原爆の日に合わせて、今年も子どもたちが鶴を折りました。子どもたちがもう一度修学旅行へ行けることはないかもしれません。学校はいずれ閉鎖になります。今年までか、それとも何年かあとになるのかわからないとしても、子どもたちは別の学校へ移ることになるでしょう。

この学校以外に、広島へ修学旅行に行くブラジル人学校はないと思います。

広島へ届ける代わりに、このニュースに同封します。平和への祈りを込めて。



## 校長、表彰を受ける！？

公益財団法人社会貢献支援財団より訪問があり、ロンガット校長がインタビューを受けました。

今年の3月、「社会貢献者表彰」推薦募集の案内がセンターに来た際、熟考の末ロンガット校長を推すことにしました。

通常は他団体や、他団体に所属する人を推薦するものだと思いますが、今われわれの身近にいる人間としては校長が最もふさわしいと考えました。

手前味噌で、なかなか通りにくい推薦だったかもしれませんが、しかし最終選考に残り面接ということになりました。手前味噌に加えて、とらぬ狸の皮算用ですが、内定しているのではないかと期待しています。

発表は秋になります。表彰されれば子どもたちもうれしく、誇らしいことでしょう。もし表彰に漏れてもロンガット校長の仕事の価値が減るものではありません。

社会貢献者表彰への推薦文をお読みください  
(裏面記事は修学旅行取材した朝日新聞)

2005年1月、一人の女性教師が来日しました。故国に11歳の娘と夫を残し、日本のブラジル人学校で働くためです。

日本では、ブラジル人の子どもたちの教育問題が深刻な事態を呈していました。

わが国の「義務教育」は就学年齢にある子どもを持つ保護者に対する義務を規定するもので、その範囲は「国民」に限定されています。また、国家は教育を受ける権利を保障していますが、その対象も現実的には「国民」のみ想定しています。

まったく日本語を解さない場合においても、日本語の授業を受ける権利のみ与えられ、あまりにも楽観的な意見、すなわち「こどもはすぐに外国語を覚える」という考えによって放置されています。

教育関連の研究として、外国へ移住し現地の学校に入った子供の言語発達を報告した事例は多く、一般的に、2-3年で日常会話に不自由しなくなるといわれています。そして7-8年を要して学習言語を身につけます。

たとえば10歳で入国した外国人児童は、12歳のとき日本語を一見不自由なくしゃべりますが、たとえば「おし」を知っていても「昆虫」を知らず、「ひかり」を知っていても「光線」を知らないという状況にあります。それら漢語的な学習言語を身につける前に高校を卒業する、あるいは、そもそも小学校、中学校に通い続け、義務教育を修了することが極めて困難となります。

子どもたちの多くは、勉学の意欲がないわけではありません。能力が劣るのでもありません。

意欲があり、頭がよければよいほど、まったくわからない話を黙って聞き続けることは屈辱であり、自分があまりにも理不尽な扱いをされていると感じます。彼らが学校にいかないとしても、それが彼らの責任でしょうか。

この状況に対応するため、全国各地にブラジル人学校が作られましたが、公的助成は得られず、授業料は高額です。そのためブラジル人学校を断念、しかし公立学校の日本語授業はどうも理解できないまま義務教育期間を終了する、また不就学の状態に陥る子どもたちが続出しました。この状況を見かねて、さまざまなグループが行動を起こしました。

保見では、通常の半額程度の授業料で、質

の高い教育を行うことを目指し、新しい学校が設立されました。

学校の名前は「パウロ・フレイレ地域学校」。識字教育に影響を与えた、世界的に有名なブラジル人教育学者の名前を取り、また地域に支えられ、地域とともにある学校を目指した命名です。

この趣旨に賛同した全国の人々から寄付が寄せられましたが、学校を維持する原資は十分なものとはいえず、設立メンバーの持ち出し、また教員の賃金もきわめて安いという状況でした。

また、パウロフレイレ地域学校は、受け入れ児童生徒の対象を限定しませんでした。

すなわち、他校において受け入れてもらえないこども、素行に問題があったり、学習障害的児童生徒も、教育を受ける権利は平等であるという観点から、まったく同じ条件で受け入れました。

学校はただ児童生徒への教育課程をこなすだけにとどまらず、地域の公立学校に通っている、あるいは卒業したものの母語の読み書きができない人たちへの識字教育も行いました。いわゆる夜間中学です。もちろん母国で十分な教育を受けられないまま来日したブラジル人も対象です。校長の仕事は昼夜をたがわず続けられました。

新しい学校の理念は、地域の人々に支持され、生徒は順調に増え、100人に迫るところまで大きくなっていきました。

おろそその間の、ロングット校長をはじめとする、教員、スタッフの苦労は並大抵のものではありませんでした。

日本で大きな挫折を体験し、人間不信、心を開かない生徒も多くいました。

教師の指示を理解できない、従うことができないこどもも、いつも教室にいました。

ロングット校長は、類まれな教育技術と、大きな人間性を持って彼らに接し、多くの子どもたちが、閉ざしていた心を開き、勉学に目覚めていきました。

その間も学校の経済状態は苦しいままでした。給与が滞ることもしばしばでした。

教員たちは生活を切り詰め、その中でさらに自腹を切って、教材や催し物のための物品を買うこともありました。すべて子どもたちの学習のため、よりよい思い出のためです。

リーマンショックで、一挙に生徒数が減ったときは、まさに危機的な状況でした。学費を払えない生徒が続出しました。(裏面へ)

ロンガット校長は自ら給与の引き下げを申し出て、他の教員と同じ、地域の最低賃金で働きました。それでも今に至るまで払いきれていない給与が残っています。

そんな中でも、こどもたちのためにさまざまな計画を立てました。

そのひとつが「手提げプロジェクト」です。

国語の教師であると同時に、家庭科の教師でもある校長は、こどもたちとともに、さまざまなものを作っていました。そして全国の支援者に、買ってもらう計画を立てました。

企画し、報告し、作成し、販売し、お礼を伝える。生きた学習であると同時に、生徒たちの社会見学、修学旅行の原資を作ることもなりました。(新聞記事参照)

ロンガット校長は、私(推薦者)がこれまでに会ったうちで、もっとも優秀な教師といえます。それは、彼女と一日学校にいれば、たいていの人を感じることもかもしれません。

その機会がない人も、ロンガット校長と、こどもたちが作った、文集の一冊を読んでもらえれば、きっとわかっていただけるでしょう。いちばん新しい文集は「生きる、学ぶ、つづる」というテーマです。

その中でひとりの少年が、つらい体験をつづったあとこう書いています。

「それで今でも通っている ECOPAF (パウロフレイレ地域学校のポルトガル語略) に転校した。初めて学校の生徒と先生にオレのことを理解された」

別の少年はこう書きます。

「パウロフレイレに入って、この作文を書いて思いました。楽しい旅行の後で、命の意味がわかった。ここのパウロフレイレ学校の大事な意味があることがわかりました。僕は本当のことを言う。この学校が好きになった。それで、もっと学校を手伝いたい。さいほうをしたり、物をつくったり、発明したり。それからたくさんのお金を学んで学んで学んだりする」

最後にひとりの少女の詩を写し、推薦の文を終わらせていただきます。

(文集の文は、ポルトガル語の原文を、比較的日本語が得意な生徒が訳しています)

#### 学校・連帯

##### 連帯の学校・・・

みんなに手助けをする学校。

友だちとして、きょうだいとして。

ずっと結合をさがしている。

#### 連帯の学校

パウロフレイレとして

この難局のとき

連帯の運動をしている。

失業している人と貧乏な人をてつだっている

#### 連帯の学校

本体と生命に食物を供給する。

どんどん日が過ぎていく。

もっともっと人々がさがしにくる。

#### 連帯の学校

先生たちが自分の給料を減らして。

仕事をなくした人の子どもが学校に行くためです

#### 連帯の学校

社会見学をする

東京、ひろしま、なら、みやじま、あすけ、名古屋に行く。

#### 連帯の学校

共同からそんけいしてもらう

この学校に入っているからかみさまに感謝しています。

#### 私の連帯の学校

第3種郵便物認可

広島平和記念公園を歩くフェルナンダさん(左)ら「パウロ・フレイレ地域学校」の生徒たち。手にする干羽織は自分たちで作った。広島市中区、伊藤恵里奈撮影

### 修学旅行費自分で工面

#### がっこうに行きたい

題字はフェルナンダさん

4 今年1月、歴史の授業で、先生が原爆投下に触れると、生徒たちから一斉に声が上がった。「広島に行きたい」。ただ、問題はお金だった。地域学校は、全国約5000人の支援者から寄付を受け、通常のブラジル人学校の半額ほどの月3万円の授業料で運営してきた。しかし、2年前の世界同時不況で、50人以上の子供は半分以上に、今も大半の親が非正規雇用で、「親に負担をかけたくない」という思いが強かった。「原爆は知ってたけど、やけどがこんなひどいなんて」とフェルナンダさん。高熱で米が煮つ黒に焦げた弁当箱や、ポロポロになった洋服に目を丸くし、カメラで撮影した動物や草木などを縫いつけた、60個を作り、一人あたり1万5千円の旅費のうち...

9月末、愛知県豊田市のNPO法人が運営するブラジル人学校「パウロ・フレイレ地域学校」が、広島平和記念資料館を訪れた。

「ここは楽しい場所ではないけれど、展示はすべてきちんと見たい」。引率したロンガット校長がそう語りかけると、参加した8人は表情を引き締め、耳に付けた音声ガイドに聴き入った。

「よめる修学旅行の風景。でも違うのは、生徒が自分でも旅費を集めたということだ。」

アサヒ・コムでスライドショーがご覧になれます。